



TITLE:

攝河棉作地帯における農民の動向

AUTHOR(S):

脇田, 修

CITATION:

脇田, 修. 攝河棉作地帯における農民の動向. 經濟論叢 1954, 74(5): 289-311

ISSUE DATE:

1954-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/132388>

RIGHT:

經濟論叢

第七十四卷 第五號

- レーニンの市場理論について……………田 中 眞 晴 (1)
- 封建地代とブルジョア的發展……………山 田 浩 之 (19)
- 攝河棉作地帯における農民の動向……………脇 田 修 (35)
- 阿波藩における葉藍專賣制度の成立過程…大 槻 弘 (58)
- マルクスの「經濟學批判體系」と
レーニンの「帝國主義論」……………吉 信 肅 (80)
- 最高入先出法の批判的考察……………高 寺 貞 男 (97)
-

[昭和二十九年十一月]

京都大學經濟學會

攝河棉作地帯における農民の動向

脇田修

はし
が
き

元祿享保期棉作付面積比率

	田	畑	畚耕地
河内・北部 更池村(寶永2)	35.7%	?	?
同上(延享4)	43.3%	?	?
河内・古市郡 古市村(寶永5)	?	?	44.2%
攝津・仕吉郡 西喜連村 (享保15)	53.2%	98.2%	71.5%
攝津・平野郷 (寶永3)	51.0%	80.7%	61.7%

攝河棉作地帯における農民の動向

攝河棉作地帯は、堀江英一・古島敏雄氏等によつて、いわゆる中央地帯南部を代表し、國內市場形成のカナメとなつたことを指摘されている。これを特色づける棉作は、次の表の示すように元祿・享保期、早くもそのピークを示し「百姓傳記」の述べるように、元祿期すでに國內市場をリードするものであつた。棉作の發展は、その加工産業として繰棉・製織等の發展をもたらした、また生産面の進歩に應じて新興商人層の動きが、活潑になつていた。

以上のような農民經濟の成長は、この地方の農村を大きくゆすぶつてゐた。寛文・延寶期における水吞層の廣汎な排出、さらには五石・廿石の中農層の進出はそのあらわれであり、近世初頭の村落を支配してゐた重百姓たちの古い身分的隸屬關係はくずれてゐた。したがつて當時の村方では夫役を

かけるにも、従来おこなわれてきた軒別（家格による）の割當ではなく、高割にすることを小高百姓が要求し、また水呑層にも夫役をかけるといった、いわば水呑の排出・階層分化のすすむ現實にたつて、一見屈折した形での闘いがおこなわれていた。

しかも、このような農民の成長に對して、封建領主側は延寶檢地などに、その對策は一應示しながらも、ほとんど決定的な手をうちえなかったのは注目すべきであらう。ここに元祿期のすばらしい經濟的發展と、それをうみだした農民勢力の前進をみるのである。しかし封建制の重壓のもとにあつて、彼等の進路は容易なものではなかった。この小論は、享保より天保にいたる時期をかぎつて、棉作農民の姿を具體的に追求しようとしたものである。

①堀江英一氏『封建社會における資本の存在形態』五〇頁古島敏雄氏『近世における商業的農業の展開』一一頁その他

②高尾一彦・脇田修『元祿時代における畿内村落の發展』日本史研究20號參照

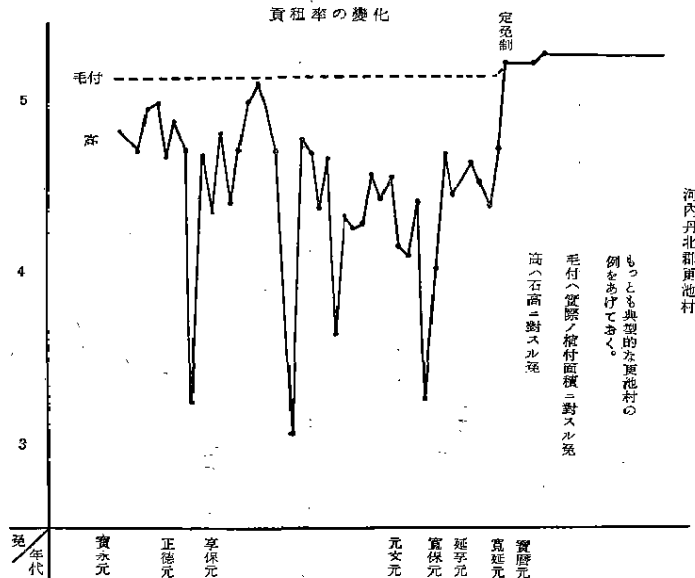
一 領主の對應

封建領主はみずからの危機をきりぬけるために、その支配體制を強化せねばならなかった。享保改革にはじまる幕政のうごきは、元祿・享保期における農民經濟の發展に對應し、これを把握しようとしたものであった。すなわちそれは貢租の重課と、商人層を統制しこれを利用しようとする株仲間官許を、大きく二つのデコとしておこなわれた。それではこの封建支配の方向が農民にどのような影響をあたえたか、次に検討してみなければならぬ。

(A) この地方では享保末年から定免制がおこなわれるが、この檢見制より定免制への移行が、どのような意味をもつていたのであらうか。

貢租率の變化

攝河棉作地帯における農民の動向



グラフは次のことを示している。享保以前には、領主側が毛付に對する免を一定にしていることによつてもわかるように、貢租率の増加・維持をはかつて、毎年用捨引をおこない貢租率の變動と低下をもたらしているのである¹⁾。

定免制は、この危機をきりぬけるためにおこなわれ、たしかに領主側にとつて安定した財源を保證したばかりでなく、平均三分から五分の増收をもたしたのであった。

それではこの増徴に農民は、どのように對したのであろうか。定免制の實施は攝河泉ではほとんど同時におこなわれていたから、入組關係の多いこの地方でも、大共同戦線による反對運動が可能であつたにもかかわらず、目立たない形で終つたのはなぜであらうか。例を古市村にとろう。ここでは享保十六年から定免制がしかれたが、六ツ五五という近村で

もまれな高免と、村内地柄の不同もあって、たびたび検見制への復歸がねがわれた。その間にあって、明和四年の訴狀が當時の情況をつたえてくれる。

すなわち領主側は定免制の利害をつぎのよう³⁾に説いている。「百姓は出精次第養ひ強く致し出来間を見合せ、實入の宜しき時節に刈取、米證が宜く、出来増し分は、全く百姓の徳用に相成」とし、さらに「検見諸帳面附け、所人馬之諸費も相減ずる」とするのである。この狙いは、明らかに「出来増し分」をもちうる中以上の農民にむけられている。もちろんその日暮しの貧農にとって、増徴と豊凶の別なく一定におさめる定免制は、決してありがたいものではない。しかし中農以上の農民にしてみれば、検見制による貢租の浮動性と、これにともなう諸役人の汚職に對する反感から、むしろ高率になつても生産力をたかめることによって向上の機會をつかもうと、定免制を喜んで迎えたのであつた。⁴⁾

かくして定免制の實施をめぐつて農民諸階層が分裂・對立し、貧農の不満はおさえられ、古市村のように地柄のわるい高免の村をのぞき、反對は表面化しなかつたのである。

この定免制の實施につづいて、領主側は小物成を増課し、さらには延享年間から田方木棉作は稻作上合毛並の收取をおこなうなど、つぎつぎと貢租を強化していった。それは棉作をはじめとする農民經濟發展の成果をくみとろうとする領主側の對應であつたといえる。したがつて播河農村が單純に低率貢租にめぐまれたなどとはいえないし、とくに商品生産によつても、かような領主側の壓力に對抗しなければ、農民の向上はありえなかつたのである。

(B) 元祿期において成長し、多くの制約をもちつつも、商品經濟の發展を代表しえた「新興商人」もようやく

保守的になり、既成の流通機構の外にあらわれた新商人たちから、その利益獨占をはかうとしていた。

平野郷においては、元祿十二年から續いた綿會所が延享二年には廢止され、「市絶申し」といった情況になっていた。それは舊問屋なかでも賣問屋が衰えたためであるが、ここには舊問屋にかわって協買衆が活躍している。「今協買衆へ、しめり綿を不構買取、私共へ綿吟味ニ掛り、先頃ノ二割茂上り申の相庭を見ながら、つよく綿買取不申」（延享四年覺帳）と舊問屋は訴えているが、彼等は協買衆の強引な商法に壓倒されていったのである。その協買衆の進出は、三拾年以前までは、おこなわれたことのなかった「百姓自分の木綿繰」を背景にしていたことはいうまでもない。⁵⁾

このような例は、同じく三郷繰きの難波村においてもみられるが、⁶⁾すくなくとも攝河兩國において經濟的に進んだ村々では同様の情況がみられたであろう。

このような情況のもとで、舊流通機構による商業資本は、その補強を幕藩權力にもとめ、領主側にとっても彼等による商業統制をおこない、ひいては農民經濟をおさえることができた。すでに享保年間「問屋の外、素人賣買を禁ず」との御觸がでていたが、昭和・安永の田沼時代には株仲間がぞくぞくとつくられていった。

しかもこの株仲間の結成は、大阪市中商人にとどまらず在郷の商人層をふくむ在株制度の形をとったことによつて、さらに大きい影響をもたらした。すでに周知のこととなっている繰綿延賣買會所の平野郷進出は、權力とむすんだ特權商人の在方への一歩進出をしめすものであった。

綿商人のみならず油絞業者についても同様である。燈火原料としての油には領主側もなみなみならぬ關心をはらっていたが、寛保三年、寶曆九年の觸によつて、問屋外商人を禁ずるとともに、地方製油の江戸直送を禁止して統

制をおこなおうとしている。さらに明和三年にいたっては自作の原料をもつてする人力油絞をのぞき、一切の油絞稼をとどめたのである。これに對して明和四年には古市村にみられるように農民・油絞業者もふくめた反對がおこなわれているが、こうした農民經濟の發展をもととした強い抵抗にあつて、同七年には領主側は攝河泉三國の在方油稼株をみるとめ、後退をおこなつた。しかしこのことは領主側が江戸廻油を確保しようとしたものであつたから、買入先の制限から村内小賣すらゆるさない統制をともない、製油は特權的な大阪出油屋にすべて送らねばならなかつた。そのため農民はもちろん油絞業者にとつても不満はつきず、かえつて出油屋との對立をはげしくし、農民ともむすんで幕府に對抗するようになるのである。

かくして油關係についても幕府とむすんだ特權商人が、農民經濟の發展をおさえていたが、金肥その他についても、大阪特權商人が攝河泉一帯に強力な流通網をめぐらしていたのであつた。

以上かんたんに領主側の對應をみてきた。要するに當時力強く擡頭しつゝあつた農民的商品經濟を統制し、その成果をとらえようとしたもので、領主側は農民間の階層分化の進行と、そのもたらす分裂的契機をたくみにつかんで政策をおしすすめたのである。すなわち一方では中農以上の要求をいれて定免制實施に成功し、他方では動搖しつゝある舊商人層と、一部の富裕な在方商人をふくめて株仲間を結成し、商業統制をおこなつたのである。

かくしてこの領主側の對策によつて、攝河農村は深刻な影響をうける。われわれはそれを次章において考えてみよう。

- ① 三宅村の例では定免制のおこなわれた寛保年間まで、旱損・虫入風損・木綿虫入と連年の用捨引がおこなわれている。
- ② 延享元年巡見使に高免をおしつけられた新田地帯では大きな抵抗がおこなわれている。(中井信彦氏『町人請負新田の性格と機

館』史學二四卷四號六七頁)

③ 關東ではあるが、田中丘圃『民間省要』日本經濟叢書第一卷二七六・二七九頁をみよ

④ 「御料所村々田方木綿作之義ハ、從延享年中比稻作上合毛並ニ御取箇被爲仰付ル」富田林・杉山家文書津田秀夫氏採訪

⑤ 平野郷については、高尾一彦氏『攝津平野郷における綿作の發展』史林34卷一・二號一〇頁によつた。なお覺帳類は津田秀夫氏の御教示をうけた。

⑥ 阿本良一氏『攝津型地域における一揆について』歴史評論三二號五二頁

⑦ 業者は(1)農間の餘業で(2)原料・製品を百姓と直賣買する有利性をあげ、農民は(1)大阪への出荷は拂いが遅れ(2)運賃がかさみ

(3)菜種一石ニ付五六匁も下直である上に(4)手持の菜種をもつて油と油脂を手に入れる便宜がなくなるとして反對している。

二 農村内部の動向

一において領主側の政策が、農民諸階層間の對立をぬつておこなわれたことをみたが、その政策による影響も、それぞれの階層によつてことなつていた。

當時の農民階層は三階層に大別することができる。(1)村方三役に屬する地主・富農層、とくに地主層は元祿・享保期に大きく土地集中をおこない、小作經營への依存はつよくなつてゐるが、なお手作をおこない商業流通面への参加はみられないのであつて、平野郷の商人地主とはことなる。(2)五石〜廿石の中農層、かれらは家族勞働と若干の雇傭勞働力によつて經營をしてゐる。(3)貧農層。

ところで當時の農業經營はようやく苦況にたちはじめていた。それは商品經濟の伸展とこれに對應した幕藩の政策によつてもたらされたことはいうまでもない。まず賃銀・肥料など生産費が高騰する。その影響をもつとも強く

うけたのは貧農層であつた。彼等は經濟的弱さのゆゑに農業經營・ことに棉作のような商品生産においては、資金の融通もつかずみすみす生産の低下をまねいたが、彼等はその際、高い小作料をはらつて經營をおこなうことや、或はなお人身的隸屬のともなう村内での奉公をきらい、さらに有利な賃銀をうるために他出していくのであつた。²⁾この貧農層のうごきは、彼等の勞働力によつて經營をおこなつていた上層農民にはねかえり、勞働力の不足・賃銀高騰は一般化していったのである。

そこで地主富農層は、この苦況をのりきるために經營の集約化をはかり、なによりも苦況の根源である封建權力とたたかわねばならなかつたのであるが、彼等は村内ヒエラルヒーを利用し、貧農層に負擔を轉荷するという安易な墮落した道をえらんだのである。すでに前代の隸屬的關係のうすれたこの地方では地主對小作・雇傭主對奉公人といった個別的交渉は力をもたなかつたから、彼等は村落共同體の規制を利用し、その力によつて貧農層をおさえようとした。すなわち當時の村法・村極の類が、こうした上層農民の意向によつてつくられていった。

平野郷においては、「地持仲間」とよばれる地主聯合がつくられ、その強力な保障は惣年寄——年寄——五人組の封建的支配機構によつてなされた。一般に村の地持層は小作料・納入規定・期日などを村極としてさだめ、もし未納なり違反のあつたときは「御村方」すなわち封建權力の末端としての村方權力を發動したのであつた。³⁾それは「ちりがかり小作」の様相をみせ、「兎角相互に實意薄」いとされるこの地方の地主小作關係をささえるものであつた。

しかし商品經濟の發達した攝河泉では、小作をしなくとも生計をたてる道は少くなかつた。奉公人として他出していくことはその例である。だが勞働力の不足と賃銀高騰に苦しむ上層農民は、ここでも明和四年西・中兩喜連村

がとつたように貧農層の村外他出をおさえようとした。すなわち兩村では奉公人給銀を公定し、さらに村外他出をすら制限した覺をとりかわし、その實施は高持よりえらばれた奉公人肝煎をおいておこなつたのである。もちろんこの方向は、安永六年五月の觸書によつてしめされるように幕府の政策とも一致するものであつた。

かくして享保以後の反動政治と、さらに村内上層農民の負擔まで、ことごとくしわよせされた貧農が、そのぎりぎりの要求をもつて立ちあがつたのも當然のことではなかつたらうか。ここに明和・安永期、攝河泉では最初ともいうべき農民闘争の高まりがみられるのである。

われわれは例を古市村にしよう。明和四年にはこの村で注目すべき二つの訴訟がおこなわれた。それは(1)先述した定免制廢止願であり、(2)油絞業者と農民が前年の油稼禁令に反對して在方油絞をみとめるようにねがつてゐることである。したがつて翌五年暮におこつた村方騒動は、この封建支配の重壓に苦しむ農民の姿をもつともよく傳へてゐる。

明和五年十二月も廿日頃「綿作免合之義ニ付、下作百姓一黨仕、城山と申所へ數百人寄合、當御役所様ニ多數ニ而御願」とはじまつた騒動は、同年の不作によつて貧農層がたちあがつたものであつた。それは善七・半三郎その他の數軒におしかけ、村方役所へもせまつた。この時、貧農層の打とわしへの發展をおそれ、仲介役をかつてて村役人と對談したのは、町々組頭と相談の上のりだした高持善八(中農?)であつた。

ところで、この貧農の要求はどう解決されたかはわからないのであるが、村方騒動は翌六年正月になつて新しい展開を示しはじめた。「高持水吞一黨仕、度度宮山城山道場へ寄合」い、この統一行動は村方儉約願として村政一般に對する要求を村役人につきつけるまでになつたのである。

二月廿八日にはこの要求をいれない村役人に對して、村民が連判をかわし、さらに會所へ數百人がおしかけて村役人をおいつめるという騒ぎになった。

しかしこうした盛上りも、農民が惣代として高持六名を上落させ、代官役所（代官角倉與一）にて村役人とあらそうことになったとき弱まっていた。役所での裁決は、なによりも法度にもそむいて徒黨をくみ騒動したことについて農民を追求し、ついに首謀とみなされる水吞九名は、手錠の上郷宿預けになり、願は取下げと農民側の敗北におわるのである。

以上ながめてきた村方騒動の経過をまとめてみると次のようであらう。

騒動は、もともと苦況にたつ下積みの貧農層から、棉作下免という直接の經濟的要求をもつてはじまった。しかし打こわしへの發展をおそれた高持善八によってなだめられ、やがて翌年の村方儉約願には、惣百姓としての要求にくみこまれていく。

それではこの十二項目にのぼる要求は、なにを示すものであらうか。

覺

- 一、御年貢算用翌年ニ勘定致、算用書通と引替させ可申事
- 一、御免定其年之分、拜見致させ可申事
- 一、毎年銀納御割賦之通、取集上納可致事
- 一、……略……
- 一、會所之儀、素々相談ニ可及事

一、支配算用之節、高頭百姓立會可申事

一、地下作、當年ヨリ百姓中ニ可被致支配事

……後略……

これについては津田氏が次のように評價されている。「貢租減免の經濟的要求から出發して、免狀・皆済目録の公開等により、貢租納入の際に村役人層に慣例的にとられている中間搾取を排除することを試み、その上村財政における從來から使用していた經費の節約、それに伴い村かかりの輕減とその民主的な負擔割當の實施の要求を出し……」と。たしかにその通りなのであるが、わたくしはここに直接的な鋭さを感じない。貧農が村役人に對してあれ程のたたかいを示したことが、じかに出ていないように思う。それはなぜだろうか。

まず正月よりの事件は、正月七日宮へ寄合をした組頭や高持で惣代となつた左エ門伊左エ門によつて指導された。つまり儉約願は、貧農層の革命化に對して動搖した高持層、それも中農以上の組頭たちがはじめたものであつた。したがつて三月十三日付の上書にみるように庄屋側は、これを惣高持百姓のケ條誓としてうけとつたのである。

いいかえれば儉約願は高持層の要求として、とくに村方事務における村役人の不正・専横の監視から、さらには「支配算用之節、高頭百姓立會可申事」に明らかのように、村政への割込みに大きな目標があつたのではないだろうか。それ故に最初は村役人も「少々不承知之義」もあつたが一應その要求をいれようとしたのである。

だがこの高持と水吞が共同戦線をかため、二月下旬におこした騒動には、すでにその推進力は水吞層にうつつていた。寄合を召集したのは水吞九名であり―彼等はその責任によつて處罰された―「庄屋年寄も如何様之義申聞ゆ而も、水吞百姓ニ至迄、一向相用不申ゆ」というように村方支配を危機におとし入れたのである。かように農民戦線

には貧農と中農の二つの流れがあつた。このあまりに脆い敗北は、中農層の動搖によるものであり、これをささえる貧農の弱さによるものであつたろう。村役人のみならず領主においても、これに注目し、水吞層の行動をもっとも警戒するとともに、中農層を戦線から分裂させ、妥協しようと圖っている。明和六年の村方勘定にさいし「當年々拾石以上の高持、小入用算用之節者立會」うよう命じ、中富農の要求をまとめたのは、そのあらわれであつた。

この古市村の村方騒動は、當時平野郷において、さらに丹南十二ヶ村においてみられた農民闘争のあり方を教えてくれる。この時期は明和六年二月の觸書にみえるように、領主側は上方筋百姓の動向に注意し、錯綜した支配關係をこえた共同の彈壓體制をとらねばならぬほどの農民闘争の高まりがみられた時である。それが貧農層の力によってささえられていたのはいうまでもないが、なお當時餘裕をもって生活していた富中農をみづからの線で統一し、さらには庄屋層をつきあげるまでにはいたっていないことをしりうる。これは逆にいえば、平野郷・丹南十二ヶ村にみられるように庄屋層の説得なり愁訴によつて代表されるような闘争だったのである。

しかしここにつみかさねられた村民のたたかいは、深まってくる危機の中で、封建支配の重壓をはねかえす力をたくわえていったのであつた。

① 高尾氏前掲論文四頁「高持ども一切耕作仕らず。」

ところが一般の地主では、手作をおこなう。古市森田家では持高一五五石餘・手作地 安永九年二四石余 寛政五年三五石餘 (森田家文書)

② この傾向は元祿享保期にいちぢるしい。別稿予定

③ 三宅村の例では「稻作之儀者小作人地主に相對熟談仕、皆濟仕れ、綿方之儀者御村方江御願申上御定被下れ」

④ この村方騒動は津田秀夫氏によつてすでに紹介されている。「攝津型地域における百姓一揆の性格」歴史評論五一年三月號、五

四頁。「封建社會崩壞期における農民闘争の「類型」」歴史學研究「一六八號六頁。これらに教えられるところが多かった。

三 大共同戦線の成立とその發展

明和年間において攝河泉一帯におこった年貢減免・村内民主化の闘争は、農村内部の矛盾とその主要な矛盾である封建支配のあり方を示してくれる。しかも安永三年の繰綿延賣買會所平野郷進出をはじめとする株仲間商人の壓迫は、その矛盾を一層深めていった。

すでに安永六年以來、繰綿延賣買會所に對しては(1)「締捌方惡敷相成、」その上(2)相場の變動による大小百姓の困窮をあげてその廢止を要求していたが、それは會所が正綿をあつかわないう延賣買の空相場をおこなったことによるものであった。安永七年にはこの反對運動のために古市郡各村が連合しはじめていた。後の千ヶ村にもこの連合は庄屋層の参加なくしては生れなかつたであらうから、問題は庄屋層がなぜ動いたかということにもなってくる。

その動きを決定づけたのは貧農の動きであつた。先述したように貧農は村外他出の奉公をもとめて行動した。しかしそれをおさえられ、さらに追いつめられた現狀にあつて、彼等はいかに生活をきりひらいていったであらうか。西喜連村の善兵衛は「元來不女意ニ罷在、依之去々丑(天明元)之夏以來、小作之間ニ少々宛商仕仕處、其秋野方不作、追而去寅大凶年ニ付、右御年貢方不足仕、勿論商方逆も不都合ニ相成」ついに天明三年の暮には同村甚右衛門の勧めによつて、大阪へ缺落するのである。何とか向上の機會をつかもうと商人になり、結局連年の凶作にあつて

脱落せねばならない貧農の姿をなによりも明瞭にすることができる。ここで貧農がもつた道が小商人であつたことは注目すべきであるが、それとともに家出をすすめるというほど、家出が一般化し、しかも農民が生産手段からはなれ、封建制の枠から脱出していくことが、むしろ彼等の生きる道であつたことを知らねばならない。それは彼等をうけいれる經濟の發展・市場の形成がすすんでいたことを示しているが、善兵衛もまた公的には帳はずれておりながら、やはり近村を舞臺に生活をしえたのであつた。こうした帳はずれの増加は、松平定信が「字下人言」でうれえたように封建的危機の端的な表現であつた。

ところがこの貧農の動きは、村有力農民にも危機をもたらしした。「近年之百姓者、奉公人給銀并日雇之者賃錢迄も格別高直ニ相成、作合甚薄キ儀……全體小作人致減少、地持共難儀存ハ」(安永7年、延寶買會所反對訴狀・森田文書)とのべ、さらに「沽却與乍申、無他事農業致出精ハ速、運拙ク及零落ハ者ハ、所をも立除ハ程之義ハ無御座ハ得共」と歎くのである。貧農の家出が、地持層に深刻な影響をもたらし、労働力の不足によつて「田地手餘」となつていく様子がうかがえよう。享保より天保にかけて多くの地主層が持高を擴大しえないのは、この貧農の動きによるものではなかつたろうか。

天明年間になると、さすがの庄屋層も「當時百姓一通リニ而取續ハ者、一人も無御座ハ」(天明八年古市村肥料高直訴狀)と現實をみつめざるをえなくなつていた。貧農の抵抗、のしかかる封建支配のために庄屋森田家のような持高一五〇石にのぼる農民であつても、その内作は赤字をだし、小作經營は行詰りをしめしていたのである。かくして庄屋層もまた眞實の敵である封建領主と特權商人とたたかわざるをえなくなつていた。ここに下からつきあげられた地主・村役人層の参加をみ、戦線は大きく擴がりはじめるのである。

天明三年繰綿延賣買會所新設反對、六年干鰯問屋仲買會所設置反對にいずれも成功し、七年には大阪の打こわしを頂點とする反封建闘争の中で、田沼にかわつた老中松平定信は繰綿延賣買會所、さらに農民の膏血をしぼつていた銀・錢小貸會所を廢止せねばならなかつた。そして翌八年には肥料高直を訴えた廿二郡八三六ヶ村の共同戦線がうまれ、幕府に追い討ちをかけていたのである。

この大共同戦線は、地主富農の参加によつて成立し、そこに参加した諸階層はそれぞれの要求をもつていた。だがそのことは岡本氏のいわれるように富農の利益擁護をねらつた「戦うための眞の革命的統一戦線ではなくなつてゐる」ことを示すものではない。こうした表現そのものの可否はおいて、もつと地主富農層が動きたしたのは貧農層の下からの力によること、その上にたつて彼等もまた主體的に封建支配に立ち向つていかねばならなかつた被支配層であることを考える必要があろう。津田氏の業績は、こうした貧農層の日常闘争をほりおこすことにむけられた。ただ氏にあつては農民の村役人層に對する闘争の把握をもつと現實に生産關係の中からうみだされる矛盾對立の上におかれなくて、高持・小前という身分として下からの勢力をとらえられたために、若干の弱さをみせ、ことに地主層の戦線への参加が地主自身の矛盾から説明されなかつたうらみをもつていた。

わたくしは不十分ながら大共同戦線が、貧農層の村内での多様なたたかいの中から生みだされてきたことを示したかったのである。しかしあの文政六年の千七ヶ村の訴訟にみられるような闘争がおこなわれるには、農村内部の大きな變化を見なければならなかつた。たしかに大共同戦線はこの地方全般に流通網をめぐらし、農民經濟の成果をしぼりとしていた特權商人に對する抗争の故にうみだされ、そこには地主層も主體的に参加せざるをえない村内日常闘争がおこなわれていたが、やがてこの戦線の先頭に在郷商人がたつようになる。

それでは農民經濟の發展がうみだし、これを代表する在郷商人とは、いつ、どのようにしてあらわれたのであるか。

先にみた西喜連村善兵衛は小商人にその活路をもとめていた。すでに「當時百姓一通りニ而取續きし者、一人も無御座し、尤商内筋携い者ハ取續い者も御座し」(天明八年古市村前揚訴狀)と、庄屋すらみとめていた現狀であつたから、貧農は積極的に商行爲にのりだしていった。史料もまた「村々小前百姓、近年ハ小商内筋ニ思ひ付」とつたえている。かように攝河泉に小商人の發生を傳える史料は多い。それらはやがて商品經濟の發展をとどめようとする領主や、その意向をうけた村役人の壓迫を打ち破つてのびていった。文化年間になると、すでに雜穀・種類・干瓢・綿・肥料・醬油・茶・油・豆腐等の商人は「村方之増様ニ取斗らひ可申事」(文化十一年太田村他取替一札)と、農民經濟に深い關連をもつ商人においては、確固たる地位を村極の中にも保證されるにいたつたのである。

以上述べたように天明年間を契機として在郷商人が發生し、それは小前層、とくに貧農層において積極的であつたが、遂にはかつて小前百姓の商筋への参加に眉をひそめた庄屋層からも、西喜連村庄屋増池彌左衛門父子のように活潑な商行爲をいとなむ者もあらわれてくる。しかも在郷商人には周知の木綿寄屋のような綿商人はもちろん、米のように貢租品としての性格から、かえつて農民の手で商品化されなかつたものにも、大阪堺の特權商人とは異つた新商人があらわれていたのである。

こうして在郷商人が農民經濟を代表して流通過程へのりだしてきたことによつて、特權商人との抗争は激しくなつた。文政六年、三所綿問屋に對する千七ヶ村の大訴訟、さらに翌年から一三〇ヶ村による油屋に對する攻撃と、在郷商人は經濟的自由を要求して農民戰線の先頭にたち、特權問屋を一步々おいつめていった。そして、そ

の闘いの中で在郷商人はすばらしい成長・発展をとげたのであった。

① 古市森田家文書

② 「天明午のとし、諸國人別改められしに、まへ之子としよりは諸國にて百四十萬人減じぬ。この減じたる人みな死にうせしにはあらず、只帳外となり……」岩波文庫「一四頁。定信は歸農策をさかんにおこなった。

③ 岡本良一氏前掲論文五五・六頁

④ 「御領分村々木綿懸合商之口入いたし、外百姓共をも相勘、右賣買ニ爲拂ひもの」天明三・太田村・柏原家文書「大ヶ塚村百姓共之内農業作問見合、小商ひいたしひもの共多分有之」石川村學術調査報告野村豊氏編文書二八七號三〇九頁。右はその一例である。

⑤ 彼等は頼母子をおこない、また在方を村あるき下人をつれて歩き木綿商をいとなみ、大阪心齋橋にも店をもっていた。それは特權的な性格がこく、中小商人とは對立している。

⑥ 「米買商人共村内へ立入不申ひニ付賣拂ひ饑饉出來、御當地（大坂）并堺商人共へ村々差向積出ひ而者格別下直ニ買取ひニ付百姓共手元勘定惡敷御座い……來春迄賣拂ひ儀見合度」（古市村國分村數ヶ村訴狀）としてそれまでのつなぎ融資として拜借銀を願っている。

四 天保期をめぐる情勢

三でみた農民闘争の高まりは、村落内部の動向とどのような關連をもち、どのような影響をあたえたであろうか。

文政五年の更池村々規約は、村内下作人に未進多く、凶年には村定の他に不相應の用捨をむさぼるとし、なかに

は「相對不行屆之時は、小作之田地毛上共、一統申合差戻」す小作地の一齊放棄のおこなわれたような地主小作關係の激化を示している。しかし注目すべきは「村方ニ寄、近年百姓之内ニ而惣代を唱、三十人組廿人組仲間を拵」えるという農民の自主的結合のうまれていることであつた。

それは西宮連村のように古來から村役を勤めた中老組（廿三名）の支配にたいして、外百姓（一五七名）が村役への參加を要求し對決するようになつてくる。そして文政八年には、ついに「御役義へ中老組より相動來ゆ得とも、萬一病身幼少、又へ人少之節へ外百姓差加」と外百姓の一步進出をみるのである。

このような組を組織し、また外百姓を代表して中老組と争つた農民は一體どのような層であつたであらうか。それを檢討するために古市村へもう一度もどつてみよう。

明和年間以後も、古市村ではたえずねばり強い村民の活動がつづけられていた。津田氏の研究から記すと次のようになる。

安永八 檢見制復歸願

天明三 綿延賣賣會所廢止願

天明六 肥料高直を訴う

天明八 檢見制復歸願

肥料高直その他を訴う

古市郡十五ヶ村

攝河八三六ヶ村

寛政六 同 右

攝河六五〇ヶ村

享和元 村方、儉約願

文化五 庄屋公選 庄屋不歸依

年貢收取法改正を訴う

篠河村々

文化十 村方出入

文政六・七 國訴庄屋三郎左衛門古市郡惣代となる

十、米商人不來のため拜借銀をこう

化政から高まってきた農民のうごきが、天保四年になって爆發する。それは當時の村方騒動の典型ともいふべきものである。少し詳細に検討してみたいと考へる。

天保年間は連年不作がつづいていたが、四年も木綿凶作となり、九月十三日には小前水吞より救米下附を願っている。ところが農民はさらに庄屋の保管している貯夫食米の利息を支拂うように要求したため、兩者は衝突し、救米はだされたが、對立はこくなつていった。廿五日には「救之重百姓」が西琳寺長圓寺に寄合ひ「百姓并無高無身上之もの」と一緒になつて救米の配分を勝手におこない氣勢をあげた。史料は「小前夫ゆゑ人氣惑亂」すといつたえている。この壓力によつて年寄宗次郎が利息として廿兩を立替へて支拂ひ、農民の要求は一應通つたのである。しかも農民側は庄屋の「取斗不行届故、年貢小入用多分相掛ひ義」と庄屋の失政をさらに追求していった。

ところが十月五日には、ついに幕吏の手がのび、十名の村民が逮捕・入牢させられた。農民はこれに對し「庄屋勘定合疑惑々事起りゆ」と申立てたので、代官所もただ彈壓するだけではすまず、堺北庄村・船松村の兩庄屋をやつて調査し、その結果庄屋は休役、翌五年三月には退役するのである。

ではこの騒動に活躍した者は、どのような階層であつたろうか。ここにかげたのは庄屋より役所へ差出した活動家の名簿である。

古市村騒動關係者表

半喜
兵兵
衛衛

平兵衛弟、近年身代限致當時無身上・發頭人・前々々大屋久兵衛……被頼

善兵衛

古市村間屋善六の後家を女房二致・同人方身體限致・當時之宅は煙亡亦助宅ニ而住居致以・小作御年貢上納一切不仕、外小作之者共迄茂妨致

久
兵
衛

帶屋利兵衛方ニ養子ニ參リ、其後困窮ニ而居宅等賣拂・南町退去當時仕合能昨年亦居宅求、其後
右居宅質物ニ差入ル、平生心立不宜者ニ御座ル

嘉兵衛

不心得二而御年貢等多分不納

忽佐
兵
二衛

無身上同僚之處近年仕合能・五六ヶ年以前

大屋久兵衛

村惣代

當年方愍代
元々惑亂發起人

儀助

祖父次兵衛之節身代組立相應之百姓二相成

常右衛門

身代立身致以。全外人二被賴同心致

新德
三
律

身持不行跡・近年御年貢等多分不調仕・上納等一切不仕外

三

前冬云 不宿門 稻粒不呈 至月以月 女乞乞 高面一 官之 什什工 有朋 八百 女

これによると活動した農民は、全く身代限りをして煙亡と同居していた善兵衛のような最下層の農民から、村物代をつとめ、古市村産の菜種の半分を一手に買占めるほどの富商であつた大屋久兵衛にいたるまで、その階層はきわめて廣汎圏にわたっている。ところで泉州新家村天明八年の村方騒動とはことなつて、ここでは農民の多くが流通過程に参加していることに氣づく。しかも商品經濟の展開のなかで、全く仕合よく身代をつくつた者もあれば、

没落する者も多いという階層分化のいちぢるしい情況を示している。すなわちここでは「近年身代限」をした貧農と「近年身代組立」でた中富農の二つの系列があったのである。われわれはこの點に留意しつつ先の騒動の過程をふりかえつてみたいと思う。

農民戦線のふくむ階層の廣がりには、そのまま農民側のつよさでもあった。五日に逮捕されるや、十九日には年寄宗次郎・他株庄屋次郎兵衛の連名で一同の宿下げをねがい、これは善兵衛半兵衛をのぞく八名の村預けとなつて實現した。さらに翌年には前記二名の村預けと、八名の赦免をこうているように村内からの運動は敏速かつ效果的であつた。

もちろん騒動は、木綿凶作による貧農の救夫食の要求にはじまつた。それ故に發起人は無身上の善兵衛であり、もつとも強く罰せられたのは煙亡と同居していた善兵衛であつた。このことは騒動をささえた力がどの階層にあつたかを明らかに示している。

だがこの事件の發展にあたつて中富農層の果たした役割をわすれることはできない。彼等は貧農のもつていたぎりぎりの經濟的要求をたたかう中で、利息銀を追求し、庄屋の勘定失態をついて、休役から退役にまで追ひこんだものであつた。徳三郎宇兵衛儀助久兵衛ら中富農がここに活躍している。彼等の役割は、先にも駒ヶ林村の例によつて指摘しておいたように、貧農層のエネルギーを利用して、たんなる村役争いにもちこもうとする傾向がないでもない。古市村でも一史料は、新檢古檢兩株の庄屋二郎兵衛が、一村一人庄屋となり、徳三郎・儀助・久兵衛は年寄役につこうとして、一方の庄屋を苦しめ小前層をまどわしたとしてゐるのは一面の眞實をつたえている。

しかし彼等は、貧農層の要求のためにたたかい、救米をともに配分したのであり、なによりも在郷商人として流

通過程をにぎつており、大阪特權商人に對して農民の利害を代表して抗争してゐたものであつた。それがこの騒動において一の組織をつくりえた要因ではなかつたろうか。村預け中の六名が、十一月廿五日庄屋方十六名の村八分を提唱しえたこと、さらに闘争においても會合不参加者には過錢五百文を課し、火の取替をしないという統制をもつてのぞみえたのは、中富農層の在郷商人としての性格からくるものであつたと考える。

しかも天保年間、當時まですぐれた經營をおこなつてきた中富農の經營が動搖し、棉作の退潮とともに轉換期にたつたときである。その點は別稿にゆづるが、古島敏雄・永原慶二兩氏の勞作『商品生産と寄生地主制』に明快に論ぜられている。

したがつて明和年間には、明らかに打こわしの方向をそらすものでしかなかった中農も、貧農のエネルギーを利用するだけでなく「御年貢等一切上納不仕」「平生心掛不宜」者として、古檢株惣代新兵衛が變りつつあつたことを忘れてはならない。半數にのぼる逮捕者が、富中農から出たことも情勢の深刻さを物語るものであつた。

かくしてこの村方騒動において、貧農層のエネルギーをつかんで支配者層と争つたのは、農民經濟の代表者・新しい流通過程の掌握者としての在郷商人だつたのである。

しかもここにみる情勢の深刻さは、地主・村役人層まで動搖においこんだ。彼等は村内の對立を、特權商人と封建支配者への攻撃（これは正しいのであるが）によつてきりぬけようとした。大鹽の一黨とそこに參加した地主富農層の行動は、そのあらわれであり、この檄文が目ざしたものが「姦吏・姦商」であつたのは、まさに時代の示すとらるでもあつた。

① 更池田中家文書

② これについても津田氏のすぐれた研究がある。前掲歴史學研究論文八頁③津田氏前掲論文一一頁

④ 池田敬正・脇田修稿『攝津八部郡駒ヶ林村文書について』日本史研究19號

とくに斷らないかぎり、文書は次の諸家所藏のものである。

古市・森田三郎左衛門家 西喜連村・長橋英一家 三宅村 橋本よしえ家 太田村（現京都市） 柏原仁兵衛家

この探訪は、高尾一彦氏の御指導のもとにおこなったものであり、氏の力にまところが多い。論文作成にあたっては、堀江英一氏の御教示をうけた。なお、古市村への第三回目の調査は京大文學部國史研究室における畿内村落綜合研究の一環としておこなった。